

#### トピックス IV

##### 百日咳の流行（感染症週報IDWR: 2008年28週（第28号）注目すべき感染症より内容を一部抜粋）

感染症発生動向調査では、全国約3,000カ所の小児科定点からの報告数に基づいて百日咳の患者発生状況の分析を行っている。2008年の百日咳の週別の定点当たり報告数は、第22週をピーク（定点当たり報告数0.11、患者報告数343）とした大きな山が認められたが、そのピークを過ぎた後も過去10年間の同時期と比較して高い状態が続いている（図1）。第1～28週までの累積報

告数は4,093例であり、2000年以降の同時期までの累積報告数と比較しても、これまで最も多かった2000年の累積報告数（2,211例）を大きく上回っている。2000～2008年まで（2008年は第28週まで）の年間の累積報告数の年齢別割合をみると、0歳児、1歳児を中心とした乳幼児からの報告割合は年々低下がみられている一方で、小児科定点からの報告ではあるものの、20歳以上の

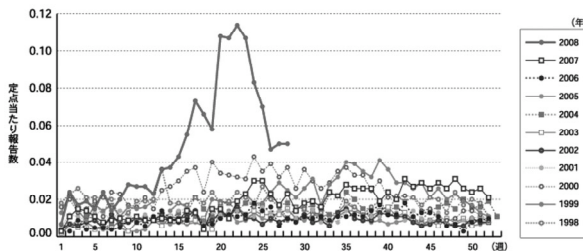


図1. 百日咳の年別・週別発生状況（1998～2008年第28週）

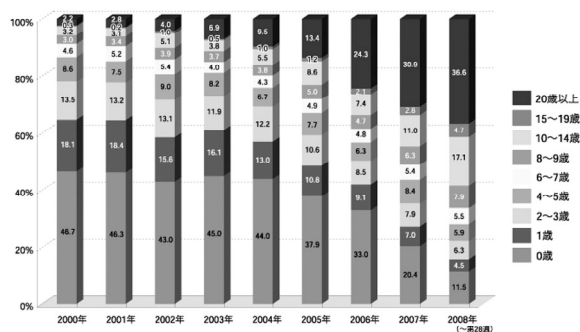


図2. 百日咳の年別・年齢群別割合 (2000年～2008年第28週)

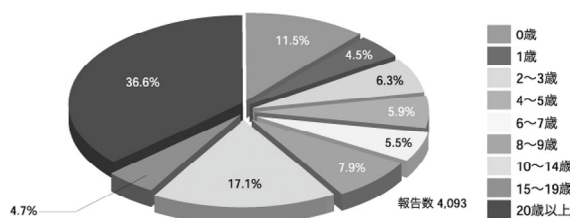


図3. 百日咳累積報告数の年齢群別割合 (2008年 第1～28週)

報告割合は年々上昇しており、2008年は28週までの報告ではあるが、20歳以上の割合は36.6%にまで達している (図2、3)。

現在の小児科定点のみからの発生動向調査だけでは、その実態を正確に把握することは困難であり、より正確な実態の把握と対策の立案が急務となってきている。感染症情報センターでは、百日咳を診断した医師よりその情報を発信

していただき、その情報を共有・分析するために、「百日咳DB：全国の百日咳発生状況」(<http://idsc.nih.go.jp/disease/pertussis/pertu-db.html>)を2008年5月8日より立ち上げた。本データベースが、全国の医療従事者や衛生部局関係者で情報共有され、今後の有効な対策の一助となることを期待する。